The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	漆の光沢を模倣した西洋のラッカー「ジャパン」：ジャパニングの技法と材料1672-1804年
Author(s)	鈴木, 裕子
Citation	デザイン理論. 2002, 41, p. 117-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

漆の光沢を模倣した西洋のラッカー「ジャパン」
── ジャパニングの技法と材料　1672－1804年 ──

鈴木裕子／アプライド・アーティスト

「ジャパン」とは何か

本発表は，ヨーロッパのラッカー「ジャパン」をとりあげ，1）「ジャパン」とは何か，2）「ジャパン」はどのように行なわれたか，を明らかにするものである。

日本では，「ジャパン」とは漆，漆器，漆塗りのことであると理解されてきた。漆工芸の専門家の著作や，英和辞典にもそのように書かれている。

しかし，日本で刊行された英和辞典を英米の英語辞典と比べると，奇妙なことに気付く。英米の英語辞典の“japan”の項には「漆」「漆器」という意味はまったく無いのに，日本の英和辞典の「ジャパン」の項には必ず「漆」「漆器」などと書かれている，ということである。英米の英語辞典を原典とし，それを和訳したはずの英和辞典に，原典を無視して「漆」「漆器」などの意味が加えられている。

英語の文献は何と書いているか。「ジャパニングとは，中国と日本のラッカー・ワークを模倣するヨーロッパの手法であった。……イギリスのジャパンは，絵の具とワニスから作られる」（R. W. シモンズ）。「1660－75年の間に，ジャパニングという新しい産業がおきた。最初はパリ，続いてロンドン，まもなくオランダ，ドイツに。……ヨーロッパの初期の作品は，インド産のシェラック，その他の樹脂を，ワインの酒精もしくは油に溶かしたワニスで作られていた」（F. ギブズ）。「中国や日本から輸入されるラッカーをヨーロッパでも作りたい。ラッカーそのものを作れないならば，その模倣品でもよい。……日本はその国名を，ラッカーを模倣するヨーロッパの試みに与えた。……ヨーロッパの模倣は，インドからガム・ラック，シェル・ラックという形で輸入される樹脂を材料とした。……漆はヨーロッパのラッカーの材料とはならなかった」（O. インピー）。

英語の“japan”が漆を意味するというのは，完全な誤りである。日本では「ジャパン」を「漆」と同一視したため，17・8世紀のヨーロッパにおいて漆が「模倣された」という重要なことを認識できなくなった。「ジャパン」は，ヨーロッパの材料とヨーロッパの技法で行なわれた。「ジャパン」に漆は使われなかった。「ジャパン」は漆の模倣である。

ジャパニングの始まり

中国や日本の漆器は，16世紀末からヨーロッパにもたらされて大きな衝撃を与えた。17世紀中頃には，同じようなものをヨーロッパでも作ろうという機運が生まれ，手もとにある材料を使って漆塗りの模倣が始まった。

ヨーロッパが漆器から受けた衝撃は，17世紀のジャパニングの技法書に記されている。それは漆器の1）丈夫さ，2）優れた光沢，3）厳かな絵柄，であった。特に「光沢」は，大きなシャンデリアや鏡に象徴される17・8世紀ヨーロッパの家具と室内装飾の趣向に合致した。漆塗りのように丈夫で，優れた光沢の美しい外観をもつキャビネット，テーブル，台，鏡の枠，暖炉用品，壁面パネルなどの製作が，ヨーロッパの材料によって始まった。それがジャパニングである。

ジャパニングは，イタリア，フランス，イ

ギリス，オランダ，ベルギー，ドイツ，北欧，ロシア，北米の植民地などで盛んに行われた。特にフランスやドイツのジャパンには，中国や日本の絵柄の空間構成も取り入れられた。

ジャパニング初期の技法とその土台

初期の技法の一例は，1688年にイギリスで出版された『ジャパニングとワニスがけ』に見られる。著者・ストーカーのジャパニングは，ラックという樹脂をワインの酒精に溶かしたワニスで行なわれる。ラックはインド原産の樹脂であるが，早くからヨーロッパに伝わっていた。このワニスに黒い顔料を加え，ターペンタインで稀釈して使う。白色・青色のジャパンには，サンドラック，マスティック，コーパルなど多種類の樹脂が使われる。漆は，いかなるジャパンにも，まったく使われない。巻末には，ジャパニングによる作品が，「いっそう漆塗りに似て見えるように」と，絵柄の手本も載っている。

他にも多くの技法があったが，樹脂，油，酒精という材料は共通していた。こうした技法はどこから来たのか。1）ヨーロッパの伝統，2）イスラムのラッカーの影響，である。

各種の樹脂を油や酒精に溶かすと，樹脂の性質に応じたワニスができる。ヨーロッパでは古くから，皮細工，柳細工，木製品や絵画の保護，あるいは銀箔を金色に見せるためにワニスが使われてきた。このワニスがけの技法がジャパニングに応用された。

イスラムのラッカーはインド以西のラッカーである。東アジアでは漆が木部の保護などに使われてきたが，インド以西ではさまざまな樹脂を油や酒精に溶いたワニスが昔から使われていた。16世紀中頃にはその一つが，技法ともどもヴェネチアに伝えられた。ヴェネチアでは，イスラムのラッカーの技法を使い，イスラムの意匠とイタリアの意匠を組み合わせた箱，楯，額縁などが作られ，ヨーロッパ中に輸出された。この技法は，イギリス，フランス，ドイツにも伝わっていた。

ヨーロッパのラッカーの確立

ヨーロッパの各国で競ってジャパニングが進められるうちに，漆塗りを越えるようなジャパンが生み出された。1）17・8世紀の漆塗りでは不可能であった色地のジャパン，2）漆塗り以上に丈夫なジャパン，である。

漆器の光沢が称賛された一方で，黒という色は，ヨーロッパでは必ずしも好まれなかった。ごく初期から白や青のジャパンが作られた。ワニスの工夫を重ねることによって，他の家具や壁の色とも調和したさまざまな色合いのジャパンの製作も可能となった。それは「色」において，ジャパンが漆を越えたことを意味した。（日本で白色の彩漆の製造が可能になるのは，この200年も後のことである。）それらのジャパンには，東洋の絵柄の模倣に代わって，無地やヨーロッパの絵柄が多く描かれるようになった。こうして，中国や日本の漆器とも，イスラムのラッカーとも異なる，ヨーロッパ独自のラッカーが確立された。

ジャパニングは木部の表面だけでなく，皮，紙，炻器，金属などの上にも行なわれた。なかでも興味深いのは，18世紀のイギリスで始まったアスファルトを使ったジャパンである。コークスを作る過程で抽出されたアスファルトを亜麻仁油と合わせ，ターペンタインで稀釈してワニスとする。それを紙製品（パピエ・マッシュ）や，この頃登場したブリキ製の水差しなどに塗り，高温で焼いたものである。それらは，黒色の強い光沢を持ち，高熱にも耐える丈夫さを特徴としていた。こうして，漆塗り以上に丈夫で，はるかに安価なジャパンが誕生した。この方法は19世紀後半まで盛んに行われた。